

差別の世界と戦争

京都大学原子炉実験所 小出 裕章

人という生き物

霊長類と自らを名づけた人類

地球は46億年に誕生したといわれます。誕生当初の地球は生命が根付くには過酷過ぎ、生命が誕生するまでには数億年の時の流れが必要でした。40億年前に生まれた生命は、おそらくは今の常識から言えば、生命と呼ぶにはあまりにも原始的なものだったでしょう。その後、様々な生物種が生まれ、そして滅びました。人類と呼べるような生物種がこの地球上に誕生したのは、400万年前とも600万年前とも言われますが、地球や生命の歴史から見れば、いずれにしても人類の歴史など1000分の1の長さでしかありません。もし、地球の歴史を1年として1月1日から時をたどれば、人類が発生したのは春が過ぎ、夏が過ぎ、そして秋も過ぎ、冬が来て、大晦日の午後になってからに過ぎません。

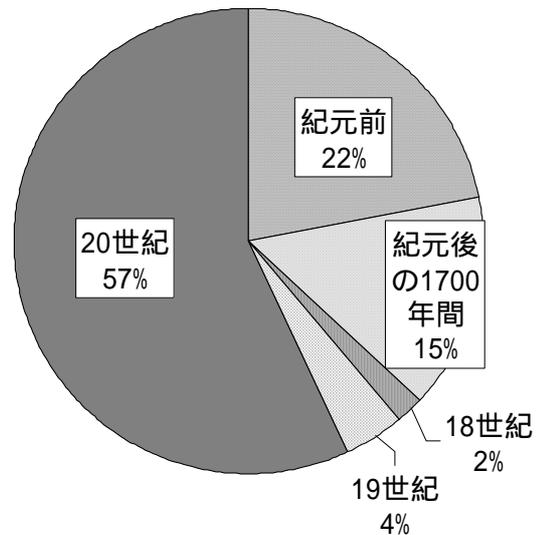


図1 人類のエネルギー消費量

その人類は現在地球上で栄華を極めていますが、人類が今日のようにエネルギーを膨大に使い始めるようになったのは18世紀末の産業革命からで、それ以降わずか200年しかたっていません。それを地球の歴史を1年と考える尺度に当てはめれば、大晦日の夜11時59分59秒にしかならず、残り1秒のことです。図1に示すように、その200年の歴史で人類が使ったエネルギーは人類が数百万年で使った全エネルギーの6割を超えます。

命あるもの滅するのは必然です。個体にしてもそうですし、種としての生物もそうです。これまでもたくさん生物種がこの地球上に生まれては滅びてきました。数千万年前までこの地球を支配していたといわれる恐竜たちも、忽然と姿を消しました。その原因は、宇宙からの巨大隕石の落下だという説もあれば、

祇園精舎の鐘の声
 諸行無常の響きあり
 娑羅双樹の花の色
 盛者必衰の理をあらはす
 驕れる者は久しからず
 只春の夜の夢のごとし
 (平家物語)

肉体が巨大化しすぎて生命を維持できなくなったとの説もあります。しかし、恐竜たちからみれば、いずれにしても万やむをえない理由で絶滅に追い込まれたのでしょうか。ところが人類の栄華の影では、図2に示すように、地球上に住む多くの生物種が絶滅に追い込まれてきました。人類も一つの生物種として、いずれは絶滅するのが宿命です。しかし、人類は自らの手で他の生物種を含めた地球の生命環境を破壊してきたわけです。人類は自らを「霊長類」と名づけましたが、まさに驕り昂ぶりの典型です。人類は実に愚かな生き物ということになるでしょう。

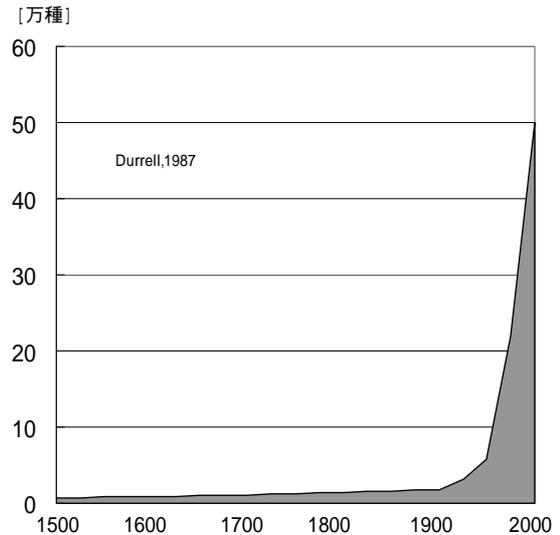


図2 急カーブで進行する種の絶滅

・ 人世界に存在する差別

ただし、地球の生命環境を破壊している責任は、人類という生物種全体にあるわけではありません。

生きるために必要なエネルギー

人という生き物が命を維持するためには、言うまでもなくエネルギーが必要です。たとえば、成人は1日当たり2000kcal程度の食べ物を食べなければ栄養失調になります。また、それだけでなく、衛生状態に注意し、綺麗な水を飲み、そしてそれなりの医療を受けることだっ命の維持には必要です。日本人についてエネルギー消費と寿命の関係を調べてみれば、図3となります。今からわずか100年前の日本人の平均寿命は40歳台でした。それには戦争という要因もあったでしょうし、使えるエネルギーがわずかであったことも一因であったでしょう。

平均寿命 [歳]

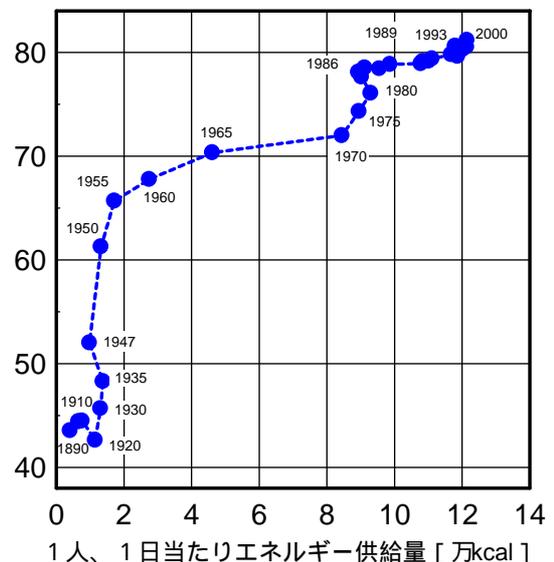


図3 日本におけるエネルギー消費量と寿命の関係

日本国勢図会2003/04(国勢社)、
総合エネルギー統計などのデータより作成

エネルギー消費量の格差

それほど、エネルギーとは人間が生きることに関係があります。では、世界でエネルギーはどのように使われているのかを各国別に調べ

て図にすると図4になります。最もエネルギーを使える国と、最も使えない国を比べれば何と1000倍もの格差があります。この図に縦に線を引いたように、世界を4つのグループに分けて考えれば、一番エネルギーを使ういわゆる「先進国」が全体の8割のエネルギーを使ってしまっています。次のグループが12%を使い、世界人口の半分を占めるいわゆる第3世界の人々には8%のエネルギーしか残されません。そしてその中での分捕り合戦の結果、一番貧しい14億の人々は全体のわずか2%のエネルギーしか使えないまま死に瀕しています。今現在でも、アフリカ諸国の中には、平均寿命が40歳台の国がありますし、アジア・アフリカ・中南米の多くの国々はほとんどエネルギーを使えないまま苦しんでいます。その点を図5に示します。

現在地球の人口は約60億人ですが、エネルギーを湯水のごとく使い、贅沢な暮らしをしているのは「先進国」と呼ばれるごく一部の国でしかありません。その一方では5億の人々が飢餓に直面して死線をさまよひ、10億を超える人々が絶対的貧困(1日1米ドル(購買力平価換算)以下で生活する人。食べ物、安全な飲み水、下水道設備、健康、保護施設、教育、および情報を含む基礎的な人間的必要が非常に制限されている状態)にあえいでいるのが人の世界の現実です。

一層の差別を維持するための殺戮、戦争

人類の歴史は戦争の歴史でした。戦争の動機は力の強いものが一層の栄華を求めることであり、戦争の結果、力の弱いものはますます苦しい生活に追いやられます。かつて日本は中国大陸や南方の資源を求めて侵略戦争に走りました。その拳句に、日本よりはるかに強い米国に叩きのめされました。ちょうど社会主義や共産主義が世界に台頭してきた時期であり、戦後世界は二分されて冷戦と呼ばれる時代に入りました。日本は天皇制の維持が許されたことで、丸ごと米国の属国となりましたが、本来なら日本の植民地から解放されるはずであった朝鮮半島は血で血を洗う内

1人1日当たりエネルギー消費量
[万kcal/日/人]

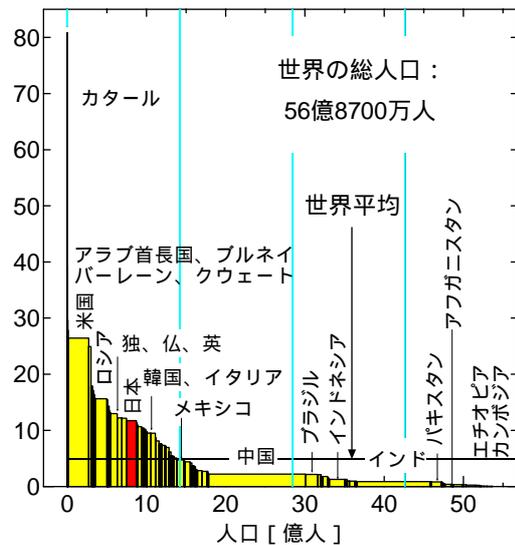
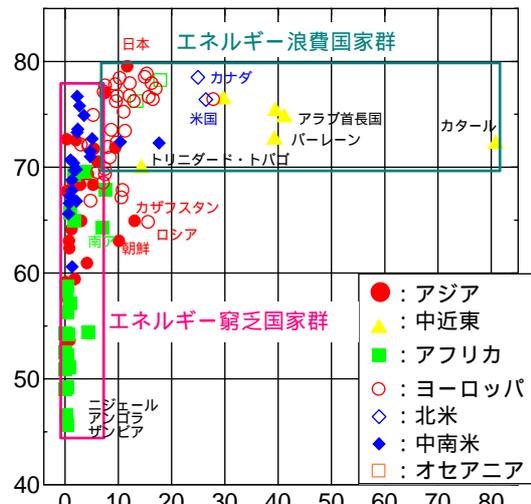


図4 1人あたりエネルギー使用量の不公平 (1995年)

平均寿命[歳]



1人1日当たりエネルギー消費量[万kcal/日/人]

図5 世界各国のエネルギー消費量と平均寿命 (1995年)

戦となった拳句に南北に分断されてしまいました。冷戦構造を作り上げた米国の立役者ジョージ・ケナンは当時次のような文章を残しています。

「我々の人口は世界の6.3%に過ぎないが、世界の富の約半分を所有している。・・・こうした状況では、我々が羨みと憤慨の対象となることは避けられない。今後我々が本当にしなくてはならないことは、この均衡のとれない位置を維持できるような国際関係の様式を作り上げることである。そのためには感傷主義と夢想は捨て、あらゆる面で、我々の国家目的に注意を集中しなくてはならない。・・・我々がはっきりと力によって問題に対処しなければならない日が来るのはそう遠いことではない。・・・最終的な答えは気持ちのいいものではないかも知れないが・・・各国政府の警察を使って人々に弾圧を加えることを躊躇してはならない。」(政策計画研究 23、1948年)

そしてこれは過去のことでありません。2002年9月20日、ブッシュ米国大統領は「米国家安全保障戦略」を発表し、次のように主張しました。

「米国はかつてないほどの力と世界への影響力を持っており、この力は自由を希求する国々の力の均衡を推進するために使われなければならない。脅威が米国の国境に達する前に探知し、破壊することで、米国民とわれわれの国内外での利益を防衛する。米国は国際社会の支持を得るために努力を継続するが、必要とあれば、単独行動をためらわず、先制する形で自衛権を行使する。米国は、自分たちの意思をわが国とその同盟国に押し付けようとする敵のどんな試みも破る能力を維持する。米国と同等かそれ以上の軍事力を築こうとする潜在的な敵に思いとどまらせるに十分な、強力な軍事力を持つ。」

何のことはない。米国は自分だけが正義であり、世界の覇者であり続けたいと言い、そのために必要であればいつでも武力を行使すると宣言しているのです。

9・11の攻撃とアフガニスタン

2001年9月11日のニューヨーク、ワシントンへの攻撃を受け、米国はアフガニスタンに攻め込みました。そして、2003年3月にはイラクに攻め込みました。それらは皆、米国がエネルギー資源を支配する目的のためにこそなされました。

アフガニスタンがいったい何をしたというのでしょうか？米国から9月11日の攻撃の首謀者とされたオサマ・ビンラディン氏はアフガニスタンにとっては長年の客人であり、



図6 中央アジアの資源とアフガニスタン

引き渡せと言うなら証拠を示せと、当然の要求をしたに過ぎません。証拠を示すことなく容疑者の引き渡しを求めるなど、どんな国際法・国内法に則っても違法です。ましてや、勝手に犯罪の嫌疑をかけた人を他の主権国家に踏み込んで逮捕することも違法ですし、主権国家そのものを転覆させることなど、いかなる意味でも正当性はありません。それにも拘らず、交渉の用意があると言っていたアフガニスタンに、問答無用、言うことを聞かなければ攻撃すると言って、米国はアフガニスタンを侵略しました。そして、日本は米国にくっついて行きました。

アフガニスタンは貧しい国です。多様な民族を抱え、ソ連・中国・インド・パキスタンそしてアラブの国々に囲まれ、他国の思惑に翻弄され続けてきました。米国にとっては中央アジアのエネルギー資源がかねてから触手の対象でした。1980年以降はソ連の支配を嫌ってタリバーンが立ち上がり、そのタリバーンを支援したのは中央アジアでの天然ガスと石油の利権をねらった米国でした。そして、図6に示すように、米国はアフガニスタンを支配下に置くことで、ついに中央アジアのエネルギー資源を手に入れる道筋を築きました。その上、この地域に対するロシアの影響力を抑えたことで、米国は9・11の被害をはるかに超える利益を得たこととなります。

イラク侵略

そして2003年春、米国はイラクが大量破壊兵器を持っていると主張してイラクの政権を転覆させました。国連と国際原子力機関(IAEA)を使って軍事施設も大統領官邸も限なく調べさせましたが、「大量破壊兵器」は見つかりませんでした。そうしたら今度は、見つからないのはイラクが隠しているからだとして主張しました。見つければ戦争、見つからなければ隠しているから悪い、だから戦争だと、どっちにいても戦争という横暴さでした。イラク全土を占領した後も、米国は威信をかけて大量破壊兵器の証拠を捜し求めましたが、ついに証拠は見つからず、調査団の団長デビッド・ケイは「兵器があったと思えぬ。生産の証拠もない」と断言するに至りました。

米国が横暴な戦争を遂行する本当の理由も

またエネルギー資源です。図7に示すようにイラクはサウジアラビアに次ぐ世界第2の石油埋蔵量を誇る国で、イラクを自分たちの言うことを聞く政権にしたいということがイラク侵略戦争、いや一方的な殺戮の最大の目的でした。そのことは、米国のルーガー上院議員が明言しています。

「もし、フランスやロシアがフセイン政権崩壊後の石油の分け前を欲しいなら軍事行動に参加すべきだ。」

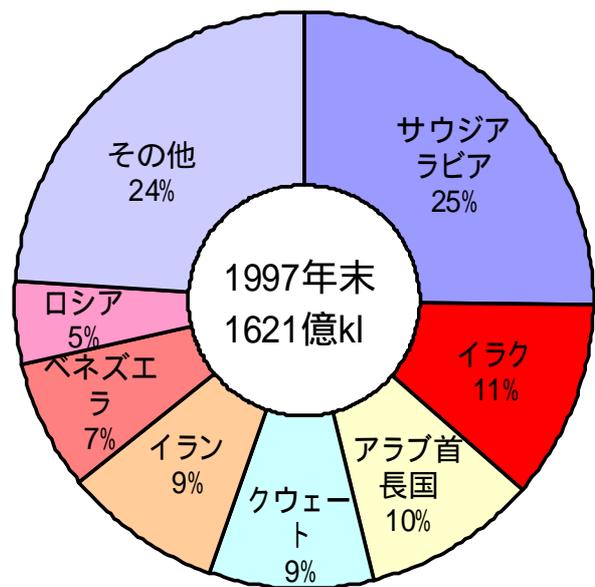


図7 世界の原油埋蔵量

真の悪の枢軸は誰なのか・・・世界は差別に満ちている

イラクに大量破壊兵器はありませんでした。そのことで、戦争の大義がなかったと反省する声が出てきました。しかし、仮にイラクが大量破壊兵器を持っていたとしても、それが一体何だというのでしょうか？ 世界で唯一核兵器を実戦使用したのは他ならぬ米国ですし、それが正当な行為であったと今なお言っている国です。そして今なお世界最大にして圧倒的な大量破壊兵器保有国は米国です。その米国が大量破壊兵器を持ち、自らの価値観にあわない国、自らの利益に反する国に対して一方的な殺戮を繰り返す世界で、どうして他の国が大量破壊兵器を持つてはいけないのでしょうか？ ましてや、当の米国から大量破壊兵器の廃棄を強制される謂れは、世界のどの国もありません。

現在、米国と日本は朝鮮民主主義人民共和国（以下、「朝鮮」と表記）が「核開発」をしようとしているとして非難し、「国際社会」なるものを騙って、朝鮮に核の放棄を迫っています。朝鮮は韓国・中国・ロシアを含めた6者協議の場で軍事用の核開発を放棄する用意はあるが、「平和」利用は放棄しないと応じています。それに対して、日本と米国は「検証可能で、後戻りできない形で、すべての核を放棄する」ことが必要で、「平和」利用も含めあらゆる核（=原子力）を放棄するよう圧力をかけてきました。

朝鮮は日本による植民地支配の拳句に、大陸から来る共産主義への防波堤として米国によって分断されたのです。1950年から始まった朝鮮戦争は1953年に米国と朝鮮の間で停戦協定が結ばただけで、ちょうど半世紀たった現在も米国と朝鮮は戦争状態にあるままです。その一方の米国は巨大な核を持ち、いつでもそれを行使すると脅して来た国です。また、自分が気に入らない国があれば先制攻撃して転覆させると公言し、実際に実行して来た国でもあります。私自身は一切の核=原子力開発に反対してきました。もちろん、朝鮮にも核に手を染めて欲しくない切に願います。しかし、米国と戦争状態にある国が核を放棄すると宣言できないことは当然ですし、戦争の一方の当事国に対してだけ一切の核を放棄せよと迫ることがそもそもおかしいのです。朝鮮に核の放棄を迫るのであれば、米国もまた核を放棄しなければ公平ではありません。朝鮮にはごく小型の原子炉がありますが、その原子炉の使用済み燃料の中からプルトニウム（長崎原爆の材料）を完璧に取り出したとした場合に作りうる最大量の原爆の規模を図8に示します。米国が現に保有している量に比べれば、10万分の1でしかありません。

また日本も「核」は軍事利用、「原子力」は平和利用というように言葉を使い分けてきて、日本が行っているものは「平和」利用である「原子力」開発であり、文明国として必須のものだと主張しています。ところが同じことを朝鮮がしようとするれば、それは「軍事」利用である「核」開発としまっているわけです。「原子力」の平和利

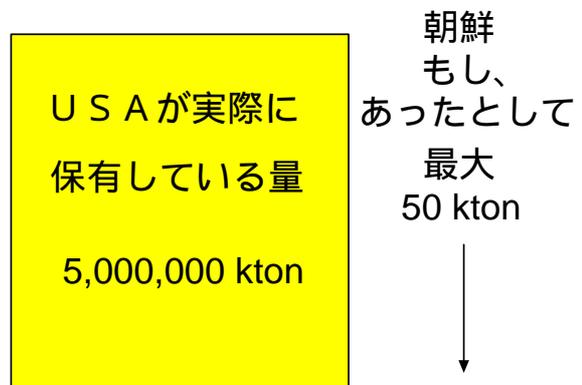


図8 米国と朝鮮の核兵器保有量の比較

ドイツ福音主義協会、マルチン・ニーメラーについて

かつて、ナチス・ドイツは600万人のユダヤ人を殺害しました。ドイツのM・ニーメラーは第1次世界戦争の時にはUボートの艦長として活躍した軍人でした。戦後、彼は福音主義教会の牧師になりましたが、キリスト教の中には「ドイツ・キリスト者」などナチズムに迎合する勢力も生まれました。彼はヒトラーの教会政策に抗して1933年「牧師緊急同盟」を結成して「ドイツ教会闘争」を指導しましたが、1937年7月に捕えられ、ナチス・ドイツ敗戦までダハウの強制収容所につながれていました。

戦後間もなく、ニーメラーは彼の妻とともにダハウの強制収容所を訪れ、その時のことを以下のように書き残しています。

「その建物（死体焼却炉）の前に1本の木が立っていて、そこに白く塗った板が掛けてあり、黒い字で何やら書いてありました。この板は、ダハウで生き残り、最後にアメリカ兵によって発見・救出された囚人たちの、いわば最後の挨拶のようなものだったのです。つまり、彼らが、先に死んでいった仲間のために書いた挨拶です。こう読めました。『1933年から1945年までの間に、23万8765名の人々がここで焼かれた』。それを読んだとき、妻が失神しそうになってわたしの腕の中に沈み、ガタガタ震えているのにわたしは気がつきませんでした。わたしは彼女を支えてやらなければなりませんでした。同時に冷雨のようなものがわたしの背すじを走るのを覚えました。妻が気分が悪くなったのは、25万人近くという数字を読んだためだと思います。この数字は、わたしにはどうということはありません。わたしはもう知っていましたから。その時わたしを冷たく戦慄させたものはいくらか別のこと、つまり『1933年から1945年まで』という2つの数字だったのです。・・・1937年の7月1日から1945年の半ばまでは、わたしにはアリバイがあります（注・その間彼は捕えられていた）。しかし、そこには『1933年から』と書いてある。・・・1937年の半ばから、戦争の終わりまでは、お前にはなるほどアリバイがある。だが、お前は問われているのだ。『1933年から37年の7月まで、お前はどこにいたのか？』と。そしてわたしは、この問からもう逃れることはできませんでした。1933年には、わたしは自由な人間だったのです・・・」

「ナチスが共産主義者を弾圧したとき、私はとても不安だった。が、共産主義者ではなかったから、何の行動も私は行わなかった。その次、ナチスはソシアリストを弾圧した。私はソシアリストではないので、何の抗議もしなかった。それから、ナチスは学生・新聞・ユダヤ人と順次弾圧の輪を広げて行き、その度に私の不安は増大した。が、それでも私は行動しなかった。ある日、ついにナチスは教会を弾圧して来た。そして私は牧師だった。が、もうその時はすべてがあまりにも遅すぎた。」

「ナチスに責任を押しつけるだけでは十分ではない。教会も自らの罪を告白しなければなりません。もし教会が、本当に信仰に生きるキリスト者から成り立っていたならば、ナチスはあれほどの不正を行うことができたでしょうか」

いま、私は日本の国家からも、また米国からもなんらの拘束も受けていませんし、この会場にお集まりの宗教者の方々もそうだと思います。その私たちは、歴史の審判に耐えられるように今を生きているのでしょうか？